



プロジェクトでは、普段なかなか知られることがない、イスラム圏・農村女性の日々の暮らしや収入、畜産業における役割についても調査を行った

（世界第8位）を誇る。シンド州だけでも、日本の総保有牛の3倍以上に相当する水牛・ウシがいて、家畜は農家の貴重な資産となっている。

さらに、シンド州にはパキスタン最大の港であるカラチ港があり、国際輸出の面でも強みを持つ。その一方で、行政サービスの未整備や、洪水の頻発などから、同州では特に農村部の貧困率が高く、約7割の家庭が日々の食料を十分に確保できていない。このため、シンド州は、畜産部門の生産性向上と商業化などを通じた、農村部の貧困削減を目標として掲げている。

「問題の改善には、小規模畜産農家の収入向上を図ることが大切です。自作農はもちろん、他人の家畜の世話など、伝統的に家畜を飼育している人たちにも畜産技術を普及し、彼らが収入を増やしていくことが肝心です」。そう話すのは、株式会社かいはつマネジメント・コンサルティングの岡部寛さんだ。JICAは、昨年2月からシンド州の畜産農家の経営改善や畜産適正技術の向上、乳畜産品の販路開拓などを通して農家の収入増加を目指すプロジェクトを実施しており、岡部さんは、そのリーダーを務めている。

配合飼料で搾乳量が増加

プロジェクト初年度の昨年は、シンド州内5県、12戸のモデル農家を対象



モヘンジョダロの遺跡から出土したコブ牛の牛車モデルのレプリカ（左）。5000年を経た現在も、農村には同じ風景がある

地域の伝統、畜産資源を生かす

パキスタン南部、インダス川下流の平野に広がるシンド州。紀元前3000年に、この地でインド亜大陸初の文明が誕生した。インダス文明最大級の都市遺跡として名高いモヘンジョダロの遺跡からは、この地域原産のコブ牛を彫刻した印章や、牛車を模した素焼きの土製品などが出土している。

それから5000年以上たった今でも、農耕・牧畜はパキスタンの重要産業だ。畜産業は国家の農業生産の約5割を占め、家畜の数では、水牛は約3100万頭（世界第2位）、ウシは3400万頭

に、乳牛の搾乳量を増やし、収入の向上を目指す試験的な取り組みを開始した。

「私たちは、現地で購入できる材料を使って配合飼料を作り、農家に配ることから始めました。十分な水を与え、飼育環境を整えることも重要です」。畜産技術者として技術部門の統括指導をする富永秀雄さんは、そう説明する。

活動を支えるのは、シンド州畜産・水産局からプロジェクトに配置された9人の専任職員と、5県の畜産局の職員だ。各県の畜産局職員は、週に一度、農家に聞き取り調査を行う。一方、専任職員たちは、乳量や体重測定などの月間測定を実施するほか、交代で各農家を回って技術的な指導にあたっている。

このような取り組みは、大きな成果を挙げつつある。今年1月に配合飼料の給与を開始すると、各農家で乳量が増加し始めた。例えば、ある農家では、1月下旬に乳牛2頭で一日計8キロだった搾乳量が、3月初旬には倍の16キロにまで増加した。

「一日の売上金で見ると、320ルピー（約400円）から1040ルピーと、3倍以上に改善しています。これは、餌代を差し引いても十分な利益です」と富永さん。この農家では、通常の乳牛の生産サイクルであれば乳量が減少



from パキスタン
Pakistan

伝統の畜産業を後押し、農家を元気に

古代文明から、農耕・牧畜の文化を継承し続けてきたパキスタン・シンド州。だが、伝統の畜産業は、その潜在力を十分に生かされていなかった。そこで、日本は畜産技術開発のプロジェクトに乗り出した。



配合飼料で乳量が増え、農家は大喜び。人々が水牛やウシを飼う理由の一つには、紅茶に牛乳を入れて飲む「チャイ」の文化がある。チャイは毎日の生活に欠かせない